

薬 玉 考

小野寺 静 子

考 玉 薬

万葉集に玉として出てくるものは、真珠であつたり竹を輪切りにしたものであつたり石を丸く磨いた宝石の類であつたりするが、中に薬玉のこととされるものがある。現在も薬玉と称されるものがあるが、それは別のものであることは間違いないが、万葉集で薬玉とされるものはどのようなものであつたか、あるいは薬玉と称されるものが実際に万葉集中の認めることができるか、という問題がある。以下、このことについて考えてみたい。

一

万葉集では、玉に糸や紐を通すことを「貫く」と表現する。その場合、「玉を貫く」という云い方と「玉に貫く」という云い方がある。両者にはどのような違いがあるのだろうか。まず、「玉を貫く」という云い方のものから見てみよう。

竹玉乎間なく貫き垂れ（三・四二〇）

竹珠乎しじに貫き垂れ（九・一七九〇）

竹珠乎間なく貫き垂れ（十三・三三八四）

竹珠叫しじに貫き垂れ（十三・三三八六）

これらは竹を輪切りにし、それに紐・糸を通したものをいうのだから、「（竹）玉を貫く」という表現は、実際に玉状のものを紐・糸で貫き通すことをいうと考えられる。

時ならず玉乎そ貫ける卯の花の五月を待たば久しくあるべみ

（十・一九七五・夏雑）

の二句目は、上の例にならえば、玉を紐・糸で貫き通すことを表わしたといえよう。この玉はいかなる玉か。歌われていないのだから、これを特定できず、いわゆる丸いものをいったといえよう。この立場をとるのが私注で、私注では一句目を「時じくの」とよみ、卯の花が咲く五月を待ちきれずに季節に係わりない玉を貫いてかざしにしたと解する。これに対し一句目は「時ならず」とよみ、この玉は下の句の「卯の花の五月」と関係あるととり、「五月の玉」（全集）、「薬玉」（集成）とするものがある。全注では、「玉をそ貫ける」を「卯の花が咲いているのを、玉を緒に通して連ねたさまに見立てたもの。」とするが、この玉は五月を待ち切れない気持ちを歌っているもので、「五月の玉」でないことは確かである。一句目をどう訓むかによって、その解釈は異なってくるが、「時ならず」と訓むかぎり、この玉は「卯の花の」咲く五月に対しての「時ならず」であるから、そこに植物の類に紐・糸を通したという解釈は可能であるが、この「玉」は具体的に示されていないということを重視すれば、五月の玉を念頭において時期はずれと歌ったもので、玉（真珠

とか、石を磨いたものとか」に糸、紐を通したことを歌ったものとみてよいのではないだろうか。

我なしとなわび我が背子ほととぎす鳴かも五月は多麻乎貫かさね

(十七・三九九七、家持)

の「玉」は諸注釈書で薬玉のこととする。五月になったら五月の玉を貫いて下さい、と詠んだものともとれるが、三九九五～三九九八は、池主宅での家持饗宴の歌であるから、流れのなかで捉えたとしたら、「ほととぎす鳴かも五月はさぶしけむかも」(三九九六)で「五月」が提示され、「ほととぎす鳴かも五月は玉を貫かさね」(三九九七)で五月の玉の連想から玉が詠じられ、「花橋を花ごめに玉にそ我が貫く」(三九九八)と、ここではじめて花橋の玉が詠じられるのである。従って、三九九七は「五月」と「花橋の玉」を繋ぐもので、ここではまだ明確に五月の玉(花橋の玉)は詠じられていないといえる。

以上から考えると、多少問題のあるものもあるが、万葉集の「玉を貫く」という表現は、実際に丸い形の玉を紐や糸で貫くことをいうとみなしてよい。

次に「玉に貫く」の例だが、まず、助詞が明記されているものからみる。

我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉尔貫くものにもが

(八・一五七二、家持)

玉尔貫き消たず賜らむ秋萩の末わくらばに置ける白露

(八・一六一八、湯原王)

は、白露を玉に貫くものとして歌われるものである。白露に糸、紐を通すことはできない。尾花や萩の葉末にある白露を玉として、玉とみなして緒を貫くといっている。すなわち、尾花や萩の葉末の白露を玉として、玉とみなして、緒を通すという時、「白露を……玉に貫く」と表現するのだといってよい。一方、

○……ほととぎす 鳴く五月には あやめ草 花橋を 玉尔貫き
に云ふ「貫き交へ」(縁にせむと) (三・四二三、山前王或云人麻呂)

○我がやどの花橋は散り過ぎて玉尔貫くべく実になりにけり

(八・一四八九、家持)

○ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉尔貫く日をいまだ遠みか

(八・一四九〇、家持)

○五月の花橋を君がため玉尔こそ貫け散らまく惜しみ

(八・一五〇二、坂上郎女)

○いかにいかに ある我がやどに 百枝さし 生ふる橋 玉尔貫く

(八・一五〇七、家持)

○玉尔貫く棟を家に植ゑたれば山ほととぎす離れず来むかも

(十七・三九一〇、書持)

○玉尔貫く花橋をともしみしこの我が里に来鳴かずあるらし

(十七・三九八四、家持)

○我がやどの花橋を花ごめに玉尔そ我が貫く待たば苦しみ

(十七・三九九八、石川水通)

○……(橋の花を) 白たへの 袖にも扱入れ かぐはしみ 置きて枯らしみ 落ゆる実は 玉尔貫きつつ 手に巻きて 見れども飽かず

…… (十八・四一一一、家持)

○……ほととぎす 鳴く初声を 橋の 玉尔あへ貫き かづらきて

(十九・四一八九、家持)

遊ばむはしも……

は、助詞の表記のない、

○我がやどの花橋のいつしかも玉に貫くべくその実なりなむ

(八・一四七八、家持)

○かぐはしき花橋を玉に貫き送らむ妹はみつれてもあるか

(十・一九六七)

とともに、あやめ草、花橋、棟を「玉に貫く」というものである。八・

一四八九、八・一四七八、十八・四一一を除いて五月の行事としてのものであるが、必ずしも五月五日の節句に限ったことではないだろう。あやめ草、花橘、棟を「玉に貫く」というのは、いったいどういうことをいうのであろうか。三・四二三の「あやめ草 花橘を 玉に貫き」については、あやめ草、花橘、棟を薬玉にする（拾穂抄）、あやめ草、橘の花や実を玉のように緒に貫いて蔓とする（攷證）、「玉に貫く」の「に」は、としての意であやめ草や花橘を玉のように糸を通すこと（全集）と解釈される。また、八・一四八九、八・一四七八、八・一四九〇、八・一五〇二、八・一五〇七、十・一九六七、十七・三九一〇、十七・三九八四、十七・三九九八については、あやめ草、花橘、棟に緒を通して作った薬玉とされることが多い。集中には他に、

○ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉^ルあへ貫くまでに

（八・一四六五、藤原夫人）

○ほととぎす汝が初声は我にもが五月の玉^ル交じへて貫かむ

（十・一九三九）

と、「五月の玉」というものもあるが、これらも薬玉とされることが多い（大系では橘の実、全注巻十も同様）。この薬玉というのはどういうものをいうのだろうか。近年の注釈書によると、おおよそ次の三つの解釈がなされるようである。

一 五月五日の節句に用いる薬玉。長命を祈るために麝香や沈香などの香薬を錦の袋に入れ、五色の糸で装飾した。中国の長命縷を模倣したもので、橘の若い実、菖蒲、よもぎなどを代用した（全集、八・一四六五）

二 五月五日の節句に飾る薬玉。薬玉は麝香や沈香などを袋に入れ、菖蒲、蓬、橘の実などを付けて五色の糸を垂らしたものの（集成、八・一四六五）・（添えたという解釈もある。全注、八・一四六五）

三 薬玉は中国で長命縷または続命縷と呼ばれていたのを学んだもの

で、不浄、邪気を払い、長命を祈るための呪術として、花橘・菖蒲・艾などを五色の縷（糸）に貫き、これを右肩にかけ、左の脇へ垂らして腰の辺で結んだものである。麝香・沈香などの香薬を用いたのは後のことであるらしい」（全注、十七・三九一〇）

一、二は辞典類に一般的にみえる解釈であるが、それがどのようにして用いられたのかは明確でない。辞典類には室内にかけたり身につけたもの、とあるからそのような用いられたかを考えてよいのであろうか。万葉集のあやめ草や花橘、棟を「玉に貫く」というのは、前者によれば、麝香や沈香などのかわりに錦の袋に入れたということになり、後者によれば、袋に付けたということになる。万葉集ではあやめ草や花橘、棟を「玉に貫く」と表現していることに注目すると、錦の袋に入れたというのは適切であろうか。付けたというのは、あやめ草や花橘、棟を袋のあたりに紐や糸で付けたことを「玉に貫く」といったということになるが、そういうことを「玉に貫く」といえるかについてはやはり疑問である。三の「右肩にかけ、左の脇へ垂らして腰の辺で結んだもの」というのは、「……あやめ草 花橘を 玉に貫き 一に云ふ「貫き交へ」縷にせむと」（三・四二三）や「……ほととぎす 鳴く初声を 橘の 玉にあへ貫き かづらきて」（十九・四一八九）や「落ゆる実は 玉に貫きつつ 手に巻きて」によれば、必ずしもそうした付け方をしたとは限らないが、「花橘・菖蒲・艾などを五色の縷（糸）に貫き」という指摘は、万葉集のあやめ草や花橘、棟を「玉に貫く」という表現にもっともふさわしい解釈といえるのではないだろうか。というのは、この「玉に貫く」は、玉として、玉と見なして、の意ととってよいと考えられるからである。例えば、「あやめ草 花橘を 玉に貫き」はあやめ草や花橘を玉とみなして、あやめ草や花橘に緒を貫き通すことをいうと考えてよいだろう。また、「ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに」（八・一四六五）や「ほととぎす汝が初声は我にもが五月

の玉に交じへて貫かむ」(十・一九三九)、「ほととぎす 鳴く初声を橘の 玉にあへ貫き」(十九・四一八九)によれば、ほととぎすの声といった実態のないものも橘やあやめ草などと共に玉とみなして緒に通すというものもあるが、これらも玉として、玉と見なして、の意ととてよいだろう。

天平十九年五月五日の詔に「太上天皇詔して曰く、『昔者、五日の節には常に菖蒲を用て纒とす。比来已にこの事を停めたり。今より後、菖蒲の纒に非ずは宮中に入るること勿れ』とのたまふ」ともみえるように、また、集中の、あやめ草や花橘などを玉に貫いたものは、纒にするとか、手に巻くとかするものとしてある例を考えると、薬玉について諸注釈書が必ずしも明確にしていけないという問題はあるものの、万葉集の玉に薬玉をあてはめることはできないのではないだろうか。上記十六の例は一、二でいうところの薬玉と考えるとよいことになるう。

三

集中には以下にみるように、「玉貫く」と助詞が省略された表現のものもある。これは、字数の関係で省略されたものとみえる。

○ほととぎす何の心ぞ橘の玉貫く月し来鳴含とよむる

(十七・三九一二、家持)

○……めづらしく 鳴くほととぎす あやめ草 玉貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど……

(十八・四〇八九、家持)

○……あやめ草 花橘を 娘子らが 玉貫くまでに あかねさす

昼はしめらに(ほととぎすが)あしひきの 八つ峰飛び越え……

(十九・四一六六、家持)

○……あやめ草 玉貫くまでに(ほととぎすが)鳴きとよめ 安眠寝しめず 君を悩ませ

(十九・四一七七、家持)

いずれも家持の作で、ほととぎすの鳴く声を背景に、橘、あやめ草を「玉貫く」と歌うもので、解釈としては、「玉に貫く」と同様、橘やあやめ草を玉とみなして橘やあやめ草に緒を貫き通す、と解釈してよいだろう。

また、「玉」と「貫く」ないしは「貫ける」が歌中にあるものがある。

さ雄鹿の萩に貫き置ける露の白玉あふさわに誰の人も手に巻かむ
ちふ (八・一五四七、八束)

は、上の八・一五七二や八・一六一八と同様、露を白玉というが、先の二例は尾花や萩の葉末にある白露を玉として、玉とみなして緒を貫くといっているものだが、ここでは萩に宿っている露を白玉といっていて、萩の枝がちょうど緒の働きをしていることを歌ったもので、玉に緒を通す動作を詠じたものではない。他に白露、水玉を「玉」と歌った、八・一五九八、十・二二六八、二二二九がある。

白玉の間開けつつ貫ける緒もくくり寄すればまたも逢ふものを

(十一・二四四八)

も、「貫ける」で貫いてある状態を歌ったものである。

白玉は緒絶えしにきと聞きし故にその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一四)

白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き我が玉にせむ

(十六・三八一五)

は「贈る歌」と「答ふる歌」との関係にある、寓意をもつ歌であるが、片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく

(十一・二七九二)

とともに、白玉——真珠に緒、片糸を貫き通すものを明示したものである。

……ほととぎす 声にあへ貫く 玉にもが 手に巻き持ちて 朝夕に見つつ行かむを 置きて行かば惜し(十七・四〇〇六、家持)

我が背子は玉にもがもなほととぎす声にあへ貫き手に巻きて行かむ

(十七・四〇〇七、家持)

「我が背子」が玉であつたなら、ほととぎすの声と一緒に貫き通したい、というものであり、

……鮑玉 五百箇もがも……嘆くらむ 心なぐさに ほととぎす

来鳴く五月の あやめ草 花橘に 貫き交じへ 鏝にせよと 包みて遣らむ

(十八・四一〇一、家持)

白玉を包みて遣らばあやめ草花橘にあへも貫くがね

(十八・四一〇二、家持)

も、真珠とあやめ草、花橘と交え貫きたい、というものであやめ草や花橘と真珠を交え貫くことをいったものである。

ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまでに

(十七・三九一三、家持)

の「玉」は、これまで見てきた「玉」とは異質で、散った棟の花をもつて玉となす、実質的に「玉」とはみなしがたいものをもつて玉とみなす、幻想的なもので家持ならではの作といえよう。

以上のいずれも薬玉を当てはめて考える必要はないだろう。

四

万葉集をはじめ、古事記、日本書紀、風土記、懷風藻、続日本紀など、奈良時代の文献には薬玉という語をはじめ、辞典類で示される、いわゆる薬玉とみなしうるものは見当たらないといつてよい。薬玉という語があらわれるのは、平安時代に入ってからといつてよいのである。

八代集中には、歌語としては薬玉は見当たらないが詞書きにはいくつが見える。金葉集には、

五月五日、実能卿のもとへ薬玉つかはすとて 内大臣

菖蒲草ねたくも君はとはぬかなけふは心にか、れと思ふに(一二七)

宮仕えしける女のもとに、五月五日薬玉つかはすとてよめる

内大臣

菖蒲草わが身のうきをひきかへてなべてならぬに生ひも出でなん

(一一三)

とみえ、「種々の薬草や香料を袋に入れ、菖蒲などを結んで糸を垂らしたものだ。五月五日に屋の柱にかけ無病息災を祈る。」(新日本古典文学大系)とされるが、歌には特に玉のイメージはない。新古今集には、

五月五日、薬玉つかはして侍ける人に 大納言経信

あかなくに散りにし花のいろろは残りにけりな君が袂に(二二二)

薬玉を女につかはすとて、をとこに代りて 三条院女藏人左近

沼ごとに袖ぞぬれぬるあやめ草心ににたるねをもとむとて(二〇四二)とあり、これは「種々の香を入れた網の玉に菖蒲・蓬を添えた造花を結び、五色の糸を垂らしたものだ。柱に掛けたり、腰につけ(糸を袖から肩に廻して結ぶ)て邪気を払う。」(新日本古典大系)などと注にあるが、やはり歌には特に玉のイメージはない。八代集中の薬玉は以上のようながあるが、山家集には歌中に薬玉という語がみえる。

坊なる稚児これをきゝて

散る花をけふの菖蒲の根にかけて薬玉ともやいふべかるらん(二〇三)

ただ、和歌の分野で薬玉がこれにしかみえないというわけではなく、八代集編纂のもととなった、歌合わせや私歌集などに出ている可能性はある。平安時代の作品には、

○ 御子達の御前毎にまきり(据ウ)る台(甘宛又)甘人の童を出して、興ある薬玉を給フ。(宇津保物語、祭の使)

○ はかなき薬玉、卵槌など持てありく者も、かならず取らすべし。

(枕草子、二二段)

○ 空のけしきの曇りわたりたるに、後の宮などには、縫殿より御薬玉

とて色々の糸を組みさげてまゐらせたれば、御帳立てたる母屋の柱に、左右につけたり。

(枕草子、四六段)

○ 御帳にかゝれる薬玉も、九月九日、菊に取りかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひてのち、古き御帳の内に、菖蒲・薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「折ならぬ音をなほぞかけつる」と弁の乳母のいへる返事に……

(徒然草、一三八段)

○ 簀子に助と二人ゐて、天下の木草を取り集めて「めづらかなる薬玉せむ」などいひてそゝくりゐたるほどに……

(蜻蛉日記)

○ 薬玉など、えならぬさまにて、所所より多かり。おほし沈みつる年ごろのなごりなき御ありさまにて、心ゆるび給ふ事も多かるに、おなじくは人のきずつくばかりのことなくともやみにしかな、といかゞおぼさざらむ。

(源氏物語、螢)

これらの薬玉の解釈としては、「麝香、沈香、丁香等を入れて、外側を菖蒲、蓬の造花で飾り、五尺ほどの五彩の糸を垂らしたものだ。」というのが多い。枕草子の「縫殿より御薬玉とて色々の糸を組みさげてまゐらせたれば」というのによれば、袋を縫い糸をたらず必要上、薬玉は縫殿寮の糸所で作られたのであらう。源氏物語の薬玉に対する「菖蒲や艾などの薬草を五色の糸で飾り括つたもの。」(新日本古典文学大系)という解釈によれば、必ずしも玉状の袋というとり方でもないようである。平安時代の文学作品においても薬玉のイメージは明確とは言い難い。

文学作品以外で薬玉があらわれるのは、続日本後記の嘉祥二(八四九)年の記事で、これは、いまままで挙げた諸作品に先立つものである。

嘉祥二年五月五日、武徳殿で渤海国の使者をもてなした時の詔に、「五月五日尔薬玉乎佩天飲酒人波。命長久福住止奈毛聞食漬。故是以薬玉賜比。御酒賜渡久止宣。」(続日本後記)とある。この時のことは、天安元年十一月五日の条に、「嘉祥二年春渤海客入朝。五月五日 皇帝幸_二武

徳殿。賜_二宴於賓客_一。……其日。賜_二長命縷_一佩_レ之。使者賓客歎_二其儀範_一。」(文徳実録)と重複してみえる。すなわち、嘉祥二年の記事と天安元年の記事は同じものである。嘉祥二年の条によれば、五月五日、薬玉を身につけて酒を飲むと命長く福があるとして、薬玉と酒を賜ったとあるが、その薬玉の実体は明確でない。ただ、身につけたものとある。天安元年の条には、薬玉という語はなく、長命縷とある。長命縷とは、「五月五日、以_二五綵絲_一繫_レ臂、名_二長命縷_一。」(荆楚歲時記)、「風土記曰、荆楚人、端午日以_二五綵絲_一繫_レ臂、辟_二兵鬼氣_一、一名_二長命縷_一、今百策、是也。」(事物原始)とあり、五色の絲で作ったもので、腕に繫いだものである。これによれば、玉状のものというわけではないが、これをもって薬玉と称している。辞典類で示される解釈や図は、平安時代の薬玉に適合するかについても明確ではない。

薬玉という語が確実に現れる平安時代の例でさえ、その実態はなお明確でない。唐大和東征伝によれば、「……麝香甘劑、沈香甲香・甘松香・龍腦香・膽腦香・安息香・棧香・零陵香・青木香・薰陸香、都有六百餘斤……」(奈良遺文下)とあるから、麝香・沈香の類が奈良時代に入っていたことは明らかだが、用途は香料や薬用としたようである。万葉集の五月の玉やあやめ草、花橘、棟を「玉に貫く」の玉が、麝香・沈香を入れた玉といい難く、いわゆる辞典類で示すような薬玉の謂を万葉集の五月の玉やあやめ草、花橘、棟を「玉に貫く」の玉に安易にあてることが適切ではないと考えられよう。